

# 消えたイヌワシ 人間にも価値高い生息環境

よこやま  
りゅういち  
横山 隆一

日本自然保護協会常勤理事



北海道から九州までの山岳地域にイヌワシという鳥がすんでいる。体重は3.5kg、翼を広げると175〜210cmになり、てんぐのモデルといわれている。雌雄のつがいごとに東京の山手線の内側と同じぐらいの広さのなわばり(平均61平方メートル)を持ち、ノウサギ、ヤマドリ、大型ヘビなどを餌にして生きている。そのイヌワシが絶滅の危機にある。私たちの調べでは、約10年前に281を数えたつがいが、今は237に減った。つがいになっていない個体を含めても500羽程度だろう。

私が副会長を務める日本イヌワシ研究会は9月、徳島県の剣山一帯を調査した。四国で唯一、つがいが観察されていたところだが、05年夏を最後に姿がみえなくなっていた。今回、大勢で広い範囲を同時に観察したが、確認できなかった。最近、大きな開発がなされたわけではない。70年代、剣山スーパー林道という全長87.7kmの日本最長の林道が造られた。自然林は伐採され、標高の高い場所までがスギ、ヒノキの人工林に置き換えられた。ところが当初の収穫期が来ても切られず、そのまま大きくなった木々のために森は暗くなり、イヌワシの餌となる野生動物を育てる力を失ったと考えられる。

イヌワシは、環境の質、生物の多様性が高くないと生きられない。子育てができるかどうかはそれを測る

ものさしであり、子育てできるひとまとまりの自然を守れば、たくさん生物種を同時に守ることにもなる。しかし、大金をかけたトキやコウノトリの復活に安心している間に、全国から多くの野生生物が消えていく。昔と同様、山が緑に見えていても、大きく変容しているのだ。このことは、人にとって高い価値を持つ環境も同時に失われていることを指している。清らかな水がわき出す森。特産物や道具の材料になる生きもの。新薬の原料にできる可能性をもつ植物や菌類。微生物の遺伝子までをも含む、多くの生きものがいてこそ得られる自然界からのサービスを失っているのだ。

都会の人々に、このデメリットは実感しにくいかもしれないが、手を打たなければさらに状況は悪くなる。このままでは自然の恵みがなくなり、市場価値のない人工林だけが残るのである。自然が厳しい高標高地域の大量の人工林を切って利用する仕事を作り、自然林が戻るのを助け、もともと森を取り戻そう。低標高地域の人工林は間伐し、自然と折り合いがつく資源林として管理しよう。もし、切っても材価が安く使えない道がないのであれば、関係省庁は、紙や燃料のような必需品に変えるしくみ作りから取り組むべきだ。

日本人が日々大量に使う木材の8割は、海外の森を切って輸入している。海外の森を減らし、日本の自然から恵みを生み出す力をなくし、都府の大企業経済だけを成り立たせ、自然から持続的に恵みを取り出す知恵や技術をなくす社会は、もうやめよう。四国から消えたイヌワシは、そう私たちに警告している。